ユマニチュード積極導入

社内でインストラクター育成

YSGホールディングスが運営する住宅型有料老人ホーム「ナーシングホーム横浜・長者町」（横浜市、137床）では、特に認知症と重度の要介護者への対応に注力している。認知症対応では、2年前からユマニチュードを取り入れ、効果が出てきているという。一柳昌太郎常務に話を聞いた。

一柳昌太郎 常務

――運営面で注力していることは。

一柳 認知症者と重度の要介護者への対応です。最期まで安心、安全に過ごせるホームのニーズが増えてきており、そのニーズに対応していくことが必要だと感じています。

――認知症者への対応ではどのようなことを行っているのか。

一柳 2年前からユマニチュードを取り入れました。エクサウィザーズが主催する初級研修にスタッフが参加し、修得者を順次増やしているとともに、参加した者がまだ参加していない者に教えてユマニチュードの初級を実践できるようにしています。

初級であっても当ホームでは全36名に行い、要介護3～4の女性23名に対しては、利用者の半数以上が実施後に不穏行動が減り、穏やかになったとの効果が出ています。ただし、エクサウィザーズが効果の基準を示しているわけではないため、私たちが独自で総合的に判断した結果となります。

――認知症者への今後の対応は。

一柳 パートも含め、スタッフ全員をユマニチュードの研修に参加させるのは難しいので、インストラクターを社内で育成し、全スタッフに浸透させていく計画です。インストラクターの育成は、ユマニチュードの実践に熱心な人の中から何名かをピックアップし、より高度な研修に参加してもらう考えです。

◀ユマニチュードの実技研修の様子

――重度の要介護者への対応では、どのようなことを行っているのか。

一柳 利用者本人やその家族の要望などはそれぞれ違いますので、個別に対応することを重視しています。例えば、医療従事者と家族、施設のスタッフの3者が集まるカンファレンスを必要に応じて行い、現在の身体状況を丁寧に説明して、本人、家族の要望を踏まえて、きめ細かく対応するようにしています。

▲カンファレンスの様子

看取り率は、3年位前まではほぼ100％でしたが、最近は70～80％に下がってきています。これは最期の場所の選択肢が増え、当ホームでも、利用者が選択されることを尊重しているからです。

――運営全体での今後の方針は。

一柳 一番重視することは認知症の対応にさらに強いホームにしていくことです。ユマニチュードなど専門技術を取り入れているのは、高い介護技術を学べる環境を提供することで志の高い人に応募してもらう狙いもあります。また、自立型の利用者に対するサービス強化策として、リハビリにも力を入れていく計画です。理学療法士は現在、外部の人にお願いしていますが、スタッフとして採用し、リハビリの強化プログラムを組んで実施していく考えです。

地域密着型のカフェ運営

認知症者がウェイターに

コンフォートケア 形山昌樹代表

――事業概要は。

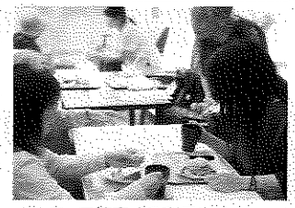
形山 私ども「コンフォートケア」はグループホームやデイサービスなどを船橋市内で運営しています。その中でも飲食事業として「カフェ・ド・ステラ（café de STELLA）」というカフェを同市で運営しています。運営する「グループホームみかんの樹」の利用者2名にウェイター業務の手伝いをしてもらうことで、自然と地域住民と施設の利用者が交流する機会を生み出しています。

――カフェを始めたきっかけは。

形山 介護報酬以外の収入源を探す中で、事業所の集中する地域にカフェがないことに気づきました。そこで地域密着型のカフェというコンセプトで2017年の11月から始めました。

――カフェでのウェイター業務の詳細は。

形山 週に数回、利用者2名にこのカフェで働いてもらっています。認知症者のため、落ち着いて仕事ができる環境を整える必要性があると感じて、ウェイター業務の中で不安が生まれないように準備を整えました。具体的には自動的にお金を計算するシステムを導入したりなど、どのような訪問客に対しても同じように応対できるようにしました。



▲カフェで接客する利用者

――どのような効果を期待できるか。

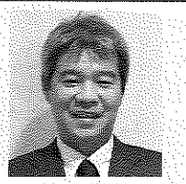
形山 カフェで仕事を始めてから自信に満ちた表情でいることが増えたと感じます。また、常連客と顔なじみになり、近隣住民からの声掛けや交流の機会が目に見えて増えたと思います。

――今後の展望は。

形山 2店舗目として地域の主婦向けの憩いの場となるようなカフェをオープンしたいと思います。そこでは障害のある人が働けるような環境を整えてより開かれたカフェを目指します。

社会参加促す施設運営

交流と“待つ”を重視



篠原俊和 施設長

関東で有料老人ホームやグループホームなどを展開するハートフルケア（東京都品川区）は働きやすい環境づくりに注力。同社が運営する介護付有料老人ホーム「ハートフル稲毛」（千葉市）では、外部ボランティアと協力したイベントやレクの開催、待つことを重視した取組みで入居者とスタッフが共に居心地の良い環境づくりを目指している。

篠原俊和施設長は「外部ボランティアはスタッフの知り合いや入居者の家族の紹介で依頼することがほとんどです」と語る。

外部ボランティアを積極的に呼ぶようにしたのは、外出の機会が少ない入居者の社会参加に繋げて、日常にメリハリをつける狙いがある。実際に普段はレクに参加しない人もボランティアの来訪時は参加するなどの効果があったという。

また、環境づくりでは入居者に対して笑顔で日々の声掛けや、一人ひとりの動きに合わせた対応を意識するように伝えている。その中で入居者のADL維持や向上に向けた生活リハなどの取組み、新人スタッフの成長などの場面では待つことの大切さも伝えて、落ち着いた環境づくりをすることで困った際に話しかけやすい職場を目指しているという。

「今後は傾聴ボランティアの受け入れなども進めて、入居者の声がより届く環境を目指したい」（篠原施設長）